

北原は1974年生まれ、ロックバンドを経てカナダにおいて05年から制作を開始、国内外のグループ展多数、中部での個展は08年に行っているが、東京では初となる。

会場に入るとミニマルアート、オブティカルアート、または工芸的要素、若しくは文様のデザインを想起させたが、まさかこれら作品群がカセットテープケースという「レディメイド」を使用しているとは思っても及ばない。



北原は紙に油彩、カセットケースを素材とした《これで決まりじゃない》を9点、マックを用いた作品1点、平面2点、磁石を用いた作品2点を展示した。平面以外は見る者が触ることによって変化する「インタラクティブ」である。北原は各作品の前に、制作意図と「鑑賞」の方法を明確に記したキャプションを用意している。説明的ではなく素直に記されているので、全く嫌味が伴わない。



総体的に作品を分析してみよう。まずその概観であるが、従来レディメイドとは既製品を用い、素材をそのままにコラージュしオブジェとしている場面が多いため、厳密にい

うと北原の作品はレディメイドを使用していない。既製品を素材として使用し、その枠組みを大きく拡張している点に注目したい。北原は既製品に自己の発想を当て嵌めるのではなく、自己の思想が既製品を呼び止めたのだ。その為、これまでに見たことのない美しさが誕生した。

全体の制作意図の記されている「コントロールする/される/しない/されない」=「ぼく 素材 作品 あなた」という循環は、触れることによって予めプログラミングされた内容が動き出す、今日に横柄するデジタル「インタラクティブ」アートとは一線を画する。

同時に、磁石を用いる点で同様であったとしても、ヤコブ・アガム(1928-)のようなキネティックアートとも異なりを示す。イスラエル人であるアガムは自らの視覚=宗教観を作品として提示する。北原は自らの視点どころか、



見る者の視点 = 存在すらも融合させて次の段階へ向かおうとしている。

このように北原の発想とは、これまでの「美術史」に当て嵌めることが出来ない。かといって、新しい美術を創造したとまでの大げさなことは言えない。ただ北原は「美術」という固定概念を持たずに自由に発想し、試行錯誤を繰り返し、作品の制作に到達したことは奇跡としても過言ではない。制作者はどうしても「見る/見られる」という関係性から逃れることができないのだ。私が北原に対して期待することは「美術」の枠組の破壊では決していない。だから新作が旧作に近くてもいい。兎も角、創り続けて欲しい。